

■岸田劉生《路傍初夏》 貸出プログラム（中学校）

美術館活用種別	複製画貸出
対象	中学生 1学級 40名程度
ねらい	作者の人生を知り、そこから生まれた作品を仲間と鑑賞する活動を通して、自身の対象を見る目と感じ方を広げる。
授業実施例	朝霞市立朝霞第3中学校 第1学年 指導者：金山 明子教諭
美術館との手続きの仕方	事前に教育広報担当に連絡を取り、使用日時と貸出期間、受け取りと返却の日時を決定する。
貸出キット内容	①岸田劉生《路傍初夏》複製画1点 ②同 小型複製画 9点 ③参考資料（岸田劉生作品 4点） ④プログラム+ワークシート 各2部
その他必要な物	①イーゼル（近代美術館でも貸し出します） ②ワークシートをクラス生徒数分印刷

1 題材名 心の道（ロード・ストーリー）

2 題材について

本題材では、岸田劉生（1891年—1929年）が人生の中でたびたび描いてきた、道をテーマとした作品の中から5点とりあげます。これらの作品は、人生で起こった出来事と深く結び付き、その時の作者の心のありようを色濃く反映しています。そうしたことを鑑賞活動を通して伝えていくことができる題材です。埼玉県立近代美術館所蔵 《路傍初夏》に秘められた作者の思いや心のありようをクラスの仲間と一緒に考えていきます。

3 学習指導要領上の位置づけ

B 鑑賞

（1）美術作品などのよさや美しさを感じ取り味わう活動を通して、鑑賞に関する次の事項を指導する。

- ア 造形的なよさや美しさ、作者の心情や意図と表現の工夫、美と機能性の調和、生活における美術の働きなどを感じ取り、作品などに対する思いや考えを説明し合うなどして、対象の見方や感じ方を広げること。
- イ 身近な地域や日本及び諸外国の美術の文化遺産などを鑑賞し、そのよさや美しさなどを感じ取り、美術文化に対する関心を高めること。

〔共通事項〕

（1）「A 表現」及び「B 鑑賞」の指導を通して、次の事項を指導する。

- ア 形や色彩、材料、光などの性質や、それらがもたらす感情を理解すること。
- イ 形や色彩の特徴などを基に、対象のイメージをとらえること。

4 目標及び評価規準

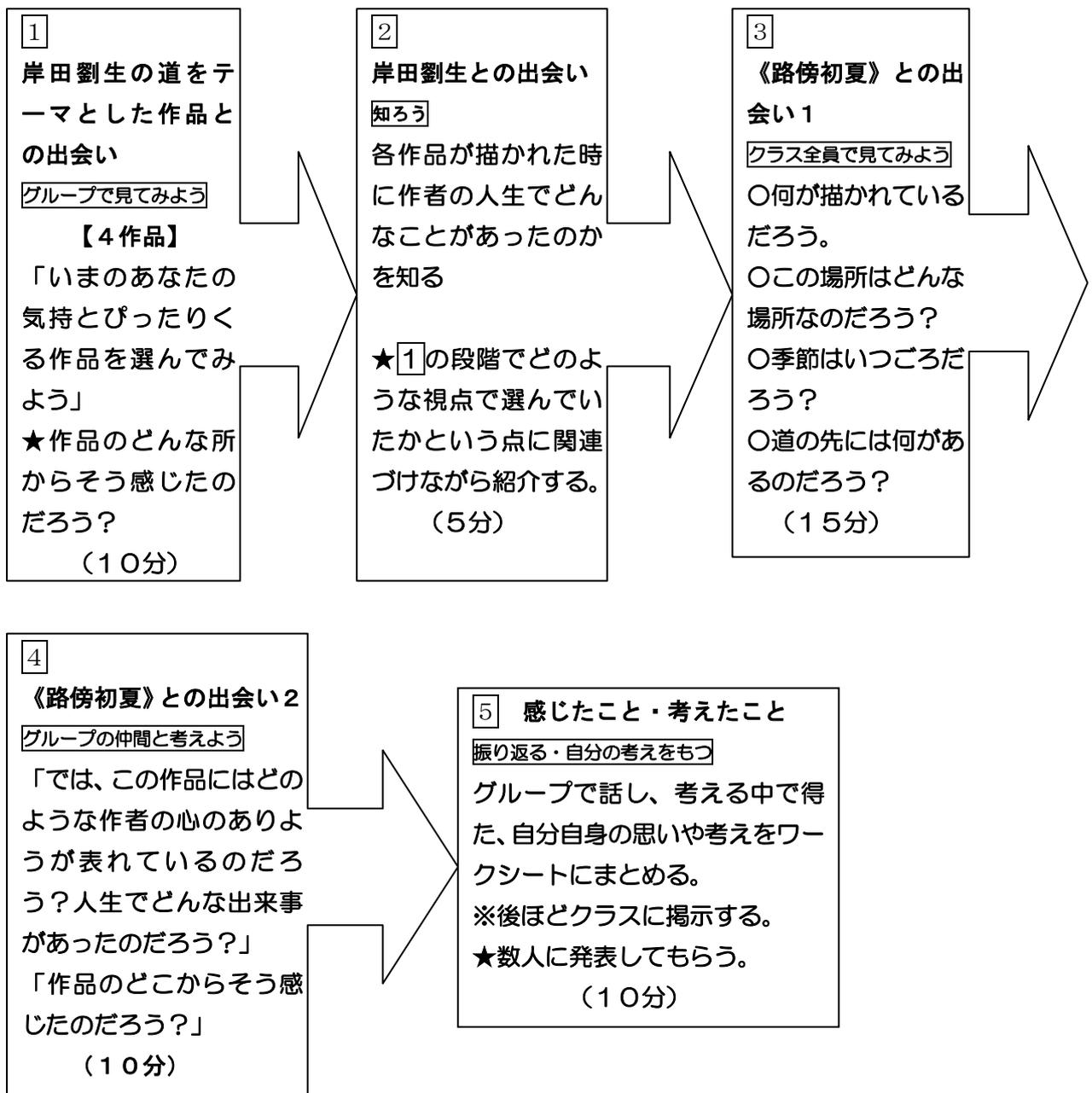
(1) 目標

- ・ 作品は、作者の人生と深く結び付いているという点に気付くとともに、そうした視点を持ちつつ作品を鑑賞することで、見方が深まることを知る。

(2) 評価規準

- ・ 鑑賞のプロセスを理解するとともに、自身の視点や考えや感じ方を広げ、深めることに関心を持ち活動することができる。(美術への関心・意欲・態度)
- ・ 作品に描かれた造形要素に気付き、それをつなぎ合わせることで生まれる自分の考えや思いを持つことができる。(鑑賞の能力)
- ・ 他者の視点や考え、思いを受け止め、自身のそれと比較したり吸収したりしながら広げていくことができる。(鑑賞の能力)

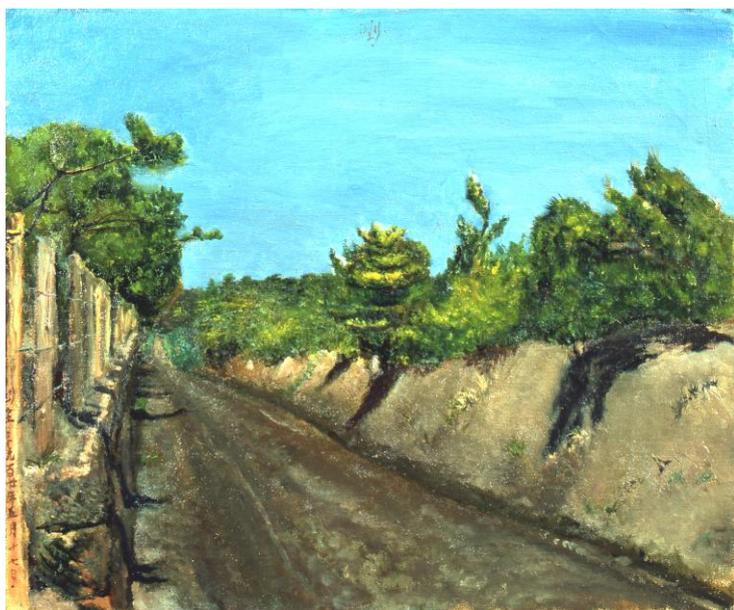
5 指導計画(1時間扱い)



展開 ★・・・〔共通事項〕との関連

過程 時間	学習活動	指導上の留意点	評価と手立て
導入 10分	<p>①岸田劉生の道をテーマとした作品との出会い</p> <p>グループで見てみよう</p> <p>【4作品】</p> <p>「いまのあなたの気持ちに合う作品を選んでみよう」</p> <p>★作品のどんな所からそう感じたのだろう？</p>	<p>○「今日は、道をテーマにした作品を4点用意しました」と、同一人物による作品であることは伏せる。</p> <p>○ある程度決まったところで、作品のどんな所からそう感じたのか、考えを簡単にメモさせる。</p> <p>○各作品ごとに1～2名程度その理由を聞く。</p>	<p>○作品から受ける印象と自身の今の気持ちを照らし合わせ、気持ちに合う作品を選ぶことができる。関<観察・発言・表現></p> <p>★作品に何が、どのように（色、形、バランス）描かれているのかと、作品を選んだ自身の理由を結びつけて考えることができる。鑑<観察・発言・表現・記述></p>
5分	<p>②岸田劉生との出会い</p> <p>知ろう</p> <p>各作品が描かれた時に作者の人生でどんなことがあったのかを知る</p> <p>「エピソードを紹介しそのエピソードがあった頃の作品を考えさせながら紹介していく」</p> <p>★①の段階でどのような視点で生徒達が選んでいたかという点に関連づけながら紹介する。</p>	<p>C1915年《道路と土手と堀》</p> <p>娘が誕生 個展で認められ、本格的に活動がはじまる 大きな展覧会の審査員に推薦される。</p> <p>B1916年《冬枯れの道路》</p> <p>肺結核と診断される 療養生活に入る。</p> <p>1920年《路傍初夏》★（ここでは紹介しない）</p> <p>健康がだいぶ回復する。庭に土俵を作って相撲をする。</p> <p>D1922年《窓外早春》</p> <p>酒を嗜むようになり、生活や趣味が変化する。歌舞伎などの伝統的な日本の美に関心が強くなる。</p> <p>A1929年《路傍秋晴れ》</p> <p>久しぶりに風景写生を行う。この絵を描いた2か月後に病死。</p>	<p>○作品と作者のその時々心のありようが深く結び付いていることに気づくことができる。関・鑑</p> <p><観察・発言・表現></p>
15分	<p>③《路傍初夏》との出会い1</p> <p>クラス全員で見てみよう</p> <p>○何が描かれているだろう。</p> <p>○この場所はどんな場所なのだろう？</p> <p>○季節はいつごろだろう？</p> <p>○道の先には何があるのだろう？</p> <p>○道は下り坂、上り坂？</p>	<p>○イーゼルで複製画を展示し、その前に生徒たちを集め、どのような作品なのかを確認していく。</p> <p>○様々な感じ方、視点を受け止めながら、季節や場所についての事実をおさえる。</p>	<p>○鑑賞のプロセスを理解するとともに、自身の視点や考えや感じ方を広げ、深めることに関心を持ち活動することができる。関<観察・発言・表現・記述></p> <p>★作品に描かれた造形要素に気付き、それをつなぎ合わせることで生まれる自分の考えや思いを持つことができる。鑑<観察・発言・表現・記述></p>
10分	<p>④《路傍初夏》との出会い2</p> <p>グループの仲間と考えよう</p> <p>「では、この作品にはどのような作者の心が表れているのだろう？人生でどんな出来事があったのだろう？」</p> <p>「作品のどこからそう感じたのだろう？」</p>	<p>○小型の複製画を使い、グループで考える。</p> <p>○作品のどこから感じたのかを大切に</p> <p>○グループで一つの考えにまとめるのではなく、自分自身の考えが持てるか、広げられるかに視点を置く。</p>	<p>○他者の視点や考え、思いを受け止め、自身のそれと比較したり吸収したりしながら広げていくことができる。鑑<観察・発言・表現・記述></p>

10分	<p>⑤ 感じたこと・考えたこと</p> <p>振り返る・自分の考えをもつ</p> <p>グループで話し、考える中で得た、自分自身の思いや考えをワークシートにまとめる。</p> <p>※後ほどクラスに掲示する。</p> <p>★数人に発表してもらう。</p>	<p>○自分自身が鑑賞の学習を通して、何を思い感じたのかをまとめる時間とする。</p> <p>○思いや感じたことを共有する場を設ける。</p>	
-----	---	---	--



岸田劉生《路傍初夏》1920年 油彩 カンバス

38.0cm×45.5cm

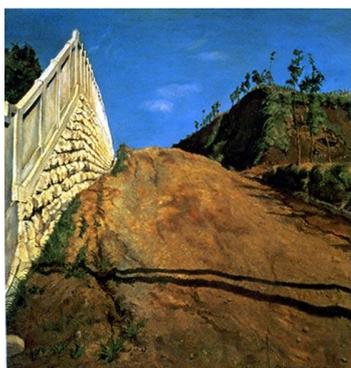
岸田劉生は1917年療養のため藤沢市鵠沼に転居した。この鵠沼時代には《麗子像》などの人物のほか風景、静物に数々の傑作が生まれ彼の最も充実した時代であった。この作品も鵠沼の風景を描いたもので、彼が生前出版した自選画集の中に、会心作の一つとして収められている。劉生は13年ごろから土の「生々しい不思議な生きた力」、道の「地軸から上へと押し上げているような力」に感動し《切通しの写生》や《赤土と草》などの風景を描いているが、この作品もそれらに連なるものである。海に近い砂地の道の質感と澄明な初夏の陽光を浴びた新緑の松の生命感が、健康を取り戻した劉生の伸びやかな筆致で見事に表現されている。



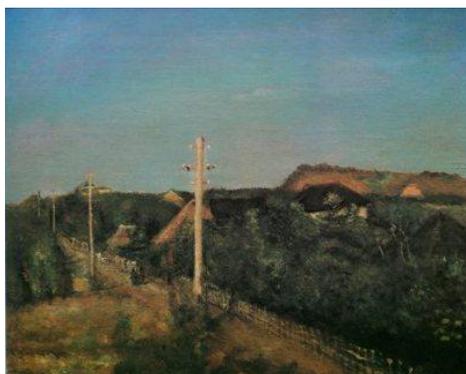
Ⓐ1929年《路傍秋晴れ》



Ⓑ1916年《冬枯れの道路》



Ⓒ1915年《道路と土手と堀》



Ⓓ1922年《窓外早春》